

がかかる努力の最後の完成を見る事なく逝かれた事に對しては心からなる哀悼の情を表したい（菊版上卷一二三〇頁、下卷九七六頁、神崎郡教育會發行）〔藤〕

●蜂須賀小六正勝 文學博士渡邊世祐著

小瀬市庵の太閤記は正勝を野武士強盜の首領であつたとし、繪本太閤記が更にこれを繪畫で説明したのでそれが廣く流傳した。爲めに秀吉の生立は面白く特色付けられたが、引合に出された正勝その人は、あられもない汚名を被せられる事になつた云つて、誤られた主人公の眞實を描き出さうとした努力である。著者は遂に石田三成の惡名を雪ぐ爲めにその傳記を書かれたが、今度はまた正勝淨化の後楯になられた。太閤記編纂の目的が勸善懲惡にあつて虚實の根本を正すに餘り力が入れられなかつたからその正勝出目に關する記事は架空になるに斷じ系譜や古文書を引用してそれを旁證した。積極的には正勝の民政上外交上の殊勳を高調することに努力してゐる（菊判二八六頁、雄山閣發行、價二、三〇）〔布村〕

●阿波に隠れたる建武の忠臣 岩松經家

島田 泉山著

本書は岩松經家の事蹟が從來殆んど湮滅して居つたのを新發見の古文書等によつて夫れを考究したもので、主として元亨四年の經家の請文に依り、經家が阿波國に在住し其の所領も義貞尊氏の夫れに比して遜色なく、而も軍船を擁して居つた點に於て兩者に勝つて居つた事を述べ、從來鎌倉討入の兩大將説が史家に認められなかつたけれども本文書によつて夫れが史實として認容される可能性が出来、又彼に對する飛彈の守護職並に十ヶ所地頭の恩賞も史實として認容さるべきもので、それは經家が内勅を奉じて倒幕の事を宗家たる足利新田兩氏の間に斡旋し義貞尊氏の同意を得て東西一時に義兵を挙げ遂に中興の大業を成就するに至つた此の斡旋の功に酬ゆる爲めの恩賞であつたに説き、其他岩松氏の末路、經家の事蹟の湮滅した原因等を子細に考證してある。卷首には經家の請文を寫眞版とし、其他建武時代勝浦郡地圖等の圖版が挿入してある（菊版假五六頁、徳島縣泉山會出版部發行、價八〇錢）

●春日石燈一覽

高田 十郎編

本書は春日神社に存する約一千八百基の石燈籠の紀年

及び施主の一覧であつて、銘の全文を記載せんとする「春日の石燈籠」の序記の部分を、しばらく別冊として發表されたものである。編者は大正十一年に同社の釣燈籠の銘文を調査され、同十三年八月から公務の餘暇に石燈籠の銘文の調査をも試み、十五年四月に其業を終へられたが、先づ石燈籠の分の一覧を作つて置いたが好都合であるとして本書を著はされたのである。其の本文は先づ石燈籠の種類を挙げ、次に石燈籠配置の概觀を記し、次に紀年及び施主一覧を調査順によつて記し、配置略圖二十數葉を其間に交へ、次に石燈籠配置の變動を調べ、最後に時代別の表を掲げてある。元來石燈籠は露天に立ちて數十年乃至數百年の風雨に曝されて文字磨滅し或は苔蒸したものがあつて互に密接したものがあつて讀字に並々ならぬ困難が有るのであるが編者が根善く多數のものを一々調査された熱心の程は敬服せざるを得ぬ。吾人は更に銘文全部を發表せられる日を待つものである（和装謄寫版刷、本文四八枚）（以上松野）

●鳩翁遺稿

柴田富三郎著

石田梅巖の創めた心學がその盛時全國に二百に餘る道場を有したミ云はれ、その門流には著聞の人も少くないが柴田鳩翁の名は鳩翁道話と共に一際光つてゐる。昨秋の御大禮に際して聖恩枯骨に及び翁が贈位の恩典に浴せられたのを機會に翁に關する遺稿全集が出た。鳩翁道話としては明治以後に翻刻されたもの十數種に及び、一部は早く英譯されて外國にさへ知られてゐる程である。併し本書は翁の孫及曾孫等一門の人達によつて、親しくその原本について編纂されたのであつて、殊に最後の鳩翁の自傳である「無由言」續編は翁の子武修の反古の裏に書いたもので、種々加筆抹殺された未完稿であつたのを、今度假名遣文字その他の體裁を改めて始めて世に出たものである。この外に翁の年譜も添へられてある。翁の學說や人爲を知るにこの上ないテキストであらう。菊制、本文一六一頁、刀江書院發行、價二、八〇（布村）

● Henri Maspero, La Chine antique
シヤヴアンヌ逝き、ペリオ稍斯學を達さかつた今日、